

早大図書館伊地知文庫『櫛葉抄』の翻刻と研究（中）

著者	竹下 豊
引用	女子大文学. 国文篇. 2001, 52, p.55-73
URL	http://doi.org/10.24729/00011086

早大図書館
伊地知文庫 『檜葉抄』の翻刻と研究(中)

竹下 豊

巻第八

- 150 いはそ、くたるみのうへのさわらひのもえいつる春になり
にける哉 志貴皇子【一四一八】 「24才
新古に入【春上・三三二】。
いいにしとし
こそその春いこしてうへしわかやとのわかきの梅は花咲にけ
り 中納言阿倍広庭卿【一四三三】
拾遺にいにしとしねこじてうへしとして入【雑春・一〇
〇八】。
- 151 春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ね
にけり 山部宿祢赤人【一四二四】
古今に入【仮名序】。
- 152 わかせこにみせんとおもひし梅花それともみえずゆきのふ
れ、は 同【一四二六】
- 153 後撰に入【春上・二二二】
あすよりはわかなつまんとしめし野にきのふもけふも雪は
ふりつ、 同【一四二七】
新古に初五あすからはとして入【春上・一一二】。
蛙なくかみなみ川に影みえていまかさくらん山ふきの花
厚見王【一四三五】 「24才
朗詠に入【春・一四二・「厚見女皇」と表記】。
時は今春になりぬとみ雪ふるとをき山辺にかすみたなひ
く 中臣朝臣武良自【一四三九】
新古に入。よみ人しらずとす【春上・九】。
うちきらし雪はふりつ、しかすかにわかへのそのに驚なく
も 大伴宿祢家持【一四四一】
後拾遺に〔入〕〔ミセケチ〕下句わが家の園に驚ぞなく
として入。
- 154
- 155
- 156
- 157

- 後撰にはよみ人しらず【春上・三三三】、拾遺には家持とす【春・一一】。
- 158 春の、にあさるき、すの妻恋にをのかあたりを人にしれイありかつ、同【一四四六】
- 拾遺にをのがありかをとして入【春・二二】。
- かみなみのいはせの杜の郭公ならしの岡にいつかきかなん 志貴皇子【一四六六】
- 159 新勅に入。田原天皇御製とす【夏・一四五】。 「25才わかやとのなてしこの花さかり也手折てひとめみせん子も哉 大伴家持【一四九六】
- 新統古に第三句咲にけりとして入【夏・三二八】。
- 161 夏の野のしけみにさける姫ゆりのしられぬ恋はくるしきものぞ 大伴坂上郎女【一五〇〇】
- 後 続拾に結句くるしきものをとして入【恋一・六三三】。
- 162 ゆふされはをくらの山に鳴鹿のこよひはなかすいねにけらしも 岡本天皇【一五一二】
- 続古に入、舒明天皇とす【秋下・四四四】。
- 163 久かたのあまの河瀬にふねうけてこよひか君かわかりきまさん 山上臣憶良【一五一九】
- 続後撰にあまの河辺に舟よせて、わたりきまさんとして
- 164 入【秋上・二五四】。
- 秋たちていくかもあらねはこのねぬる朝けの風はたもとイす、しもさむしも 安貴王【一五五五】
- 拾遺に第二いくかもあらねど、結句たもとすゝしもとして入【秋・一四二】。 「25ウ
- 165 あすか川ゆき、の岡の秋萩はけふふる雪マユに散かすきなん 丹比真人国人【一五五七】
- 新勅に入。よみ人しらずとす【秋上・二三三】。
- 166 かみな月しくれにあへるもみちはのふかは散なん風まのまにく 大伴宿祢池主【一五九〇】
- 新勅に入【冬・三六二】。
- 167 さをしかの朝たつのへの秋萩に玉とみるまてをける白露 大伴宿祢家持【一五九八】
- 新古に入【秋上・三三四】。
- 168 たかまとの野への秋萩此比のあかつき露にさきにけんかも 同【一六〇五】
- 玉葉に結句咲にけるかもとして入【秋上・四九四】。
- 169 青丹よしならの山なる黒木もてつくれる宿はをれとあかぬかも 天皇（聖武帝）【一六三八】
- 新勅に入【賀・四九三】。 「26才

170 イおく たかやまのすかのはしのきふる雪のけぬとかいふも恋のし

け、く 三国真人人足【一六五五】

古今におく山のすがのねしのぎ、下句けぬとかいはん恋のしげきとして入【恋一・五五一】。

【此歌万三に下句けなはおしけん雨なふりそね 大納言

家持】〔ミセケチ〕大伴卿とす【二九九】

171 あは雪の庭にふりしきさむきよをたまくらまかすひとりかもねん 大伴宿祢家持【一六六三】

新拾に初雪の庭にふりはへ、第四句たまくらにしてとして入【冬・六五五】。

巻第九

172 ふちしろのみさかをこゆと白たへのわか衣手はぬれにけるかも 作者不詳【一六七五】

続古に結句ぬれにける哉として入【羈旅・九一六】。

173 をくれるて我恋をれば白雲のたなひく山をけふかこゆらん 同【一六八一】

拾遺【別・三三五】・金葉【別・三三七】に入。「26ウ

174 ひこほしのかさしへ八字、「をくれるて我恋」を白く塗抹した上に書く」の玉の妻こひにみたれにけらし此川のせ

早大図書館伊地知文庫『植葉抄』の翻刻と研究(中)

に 間人宿祢【一六八六】

175 新古に入。よみ人しらすとす【新千載・恋四・一五一四】。しら鳥のさきさか山の松かけにやとりてゆけなよもふけゆくを 作者不詳【一六八七】

続古に下句やどりてゆかんよも更にけりとして入。人丸とす【羈旅・八六〇】。

176 玉くしけあけまくおしきあたたらよを衣手かれてひとりかもねん 同【一六九三】

新古に入【恋五・一四二九】。

177 さよなかと夜は更ぬらし雁かねのきこゆる空に月わたるみゆ 同【一七〇一】

古今に入【秋上・一九二】。これをとりにて、

新十 あまざかる雲路やまよふ雁がねのきこゆる空にかすむ月

かげ 後西園寺入道【春上・六九】

新拾 いつくともみえこそわかね雁がねのきこゆる空や猶かすむらん 関白前左大臣【春上・七四】 「27オ

178 山しろのくせのさき坂神代より春ははりつ、秋はちりくる 同【一七〇七】

新勅に下句春はもえつ、秋はちりけりとして入【雑四・一二六六】。

179 わきも子かあかもひつちてうへし田をかりておさめんくら

なしの浜 同【一七一〇】

拾遺に第二句あかもぬらしてとして入。人丸とす【雑

秋・一一二三】。

180 天のはら雲なき宵にうは玉のよわたる月のいらまくもお

し 同【一七二二】

新千に第二雲なき空に、結句いらまくもおしとして入。

人丸とす【秋上・四五二】。

181 さ、波のひら山風^{統千}の海ふけはつりするあまの袖かへるみ

ゆ 槐本【一七二五】

新古に第二句ひら山風^{統千}のとして入。よみ人しらずとす

【雑下・一七〇二】。

これをとりて、

しがのあまの釣する袖に月さえて雲吹かへすひらの山

草庵 風 行観法師【雑上・一七五七】

「27ウ

鳩の海や釣するあまの袖ならで波にぞかへる春の雁がね

【九四】

182 てる月を雲なかくしそしまかけにわかふねはてんとまりし

らすも 春日蔵【一七一九】

統千に下句我舟よせんとまりしらすもとして入。よみ人

しらずとす【羈旅・七七七】。

183 蛙なくむつたの川の河柳ねもころみれとあかぬ君かも 絹

【一七二三】

後世六田にあまた柳をよめり。

高瀬さす六田の淀の柳原みどりもふかくかすむ春哉 公

新古 經【春上・七二二】

新勅 五月雨に六田の淀の川柳うれこす波や滝の白糸 後徳大

寺【夏・一六五】

184 山〔城〕〔ミセケチ〕のいはたの小野のは、そ原みつ、や

君かやまちこゆらん 宇合卿【一七三〇】

新古に入【雑中・一五八九】。これをとりて、

統古 作ちるいはたの小野の凧に山おしぐれてかゝる村くも

中務卿親王【冬・五七七】 「28オ

あまの川霧たちわたりけふくとわかまつ君かふなてすら

しも 作者不詳【一七六五】

統古に第四句わがまつ君のとして入。北郷贈太政大臣と

す【秋上・三〇九】。

186 いそのかみふるのわさ田のほにいてす心のうちにこふるこ

のころ 抜気大首【一七六八】

新古に結句恋やわたらんとして入。人丸とす【恋一・九

九三。

卷第十

187 久堅のあまのかく山この夕かすみたな引春たつらしも 柿

本朝臣人丸【一八二二】

新勅入。よみ人しらずとす【春上・五】。

188 ころかてをまきもく山に春されはこのはしのきてかすみた

な引 同【一八一五】

風雅に入【春上・三二】。

189 梅のはな咲る岡へに家居せはともしくもあらし鶯のこ

ゑ 作者不詳【一八二〇】

190 冬こもり春さりくらし足引の山にも野にも鶯なくも 同

【一八二四】

続後撰に冬くれて春たちくらし、結句鶯の鳴として入。

【春上・一六】

191 いま更に雪ふらめやもかけろふのもゆる春へとなりにしも

のを 同【一八三五】

新古に第四句も△「も」は「第」の字を白く塗抹した上に

書く△ゆる春日として入【春上・二二】。

192 風ませに雪はふりつ、しかすかに霞たなひき春はききけ

り 同【一八三六】

新古に入【春上・八】。

193 梅かえに鳴てうつろふ鶯の羽白たへに淡雪そふる 同【一

八四〇】

古今に入【新古今・春上・三〇】。

194 きのおこそとしはくれしか春霞かすかの山にはやたちにつけ

り 同【一八四三】

拾遺に入。赤人とす【春・三】。

195 冬過て春はきぬらし【春霞】△ミセケチ△かすかの山にか

すみたな引 同【一八四四】

新勅に入【春上・四】。

196 山のはに雪はふりつ、しかすかにこの河柳はもえにけるか

も 同【一八四八】

新勅に初五山本に、第四句此河柳として入。赤人とす

【春上・二二】。

197 も、敷の大宮人のかつらなるしたり柳はみれとあかぬか

も 同【一八五二】

風雅に第三句かざしたるとして入。人丸とす【春中・一

〇六】。

198 いつしかも此夜の明ん鶯のこつたひちらす梅の花みん 同

【二八七三】

219 拾遺に上句袖たれていざわがそのにとして入【春・二八】。も、敷の大官人はいとまあれや梅をかさしてこ、につとへり 同【一八八三】

新古に下句さくらかざしてけふもくらしつとして入。赤人とす【春下・一〇四】。 29ウ

200 旅にして妻こひすらし郭公かみなひ山にさよふけて鳴 同【一九三八】

後撰に初五旅ねしてとして入【夏・一八七】。これをとりて、

新古をのが妻恋つ、鳴やさ月やみ神なび山の山郭公 よみ人しらず【夏・一九四】

201 郭公きなく五月のみしか夜もひとりしぬれはあかしかねつ も 同【一九八一】

拾遺に第二句なくや五月のとして入【夏・二二五】。

202 よそにのみみつ、や恋ん紅の末つむはなの色にいてすと も 同【一九九三】

拾遺に第二みてやは恋ん、結句色にいでずはとして入【恋一・六三二】。

203 みな月のつちさへさけて照日にもわか袖ひめや君にあはす

して 同【一九九五】

拾遺に入【恋三・八二五】。

204 天河水陰草の秋風になひきをみれば時はきぬらし 柿本朝臣人丸【二〇一三】 30オ

新古に結句時はきにけりとして入【秋上・三〇七・山辺赤人】。

205 天川かちの音聞ゆ彦星と〈と〉は「の」を白く塗抹した上に書くたなはたつめとこよひあふらし 柿本朝臣人丸【二〇二九】

初五彦新拾に〔彦〕〔彦〕二字分の大きさをミセケチ星の、結句こよひあふらしとして入。赤人とす【秋上・三三二】。

206 類聚ののくれにこの夕ふりくる雨は彦星のとくこく船のかいの雫か 作者不詳【二〇五二】

新古に第四句とわたる船のとして入。赤人とす【秋上・三三四】。

207 天河とをきわたりはなけれども君かふなてはとしにこそまた 同【二〇五五】

拾遺【秋・一四四】・朗詠【秋・二二八】にとをきわたりにあらねども〇す。人丸集【八三】に遠きわたりとなけれども有。拾遺に人丸とす。後撰に遠きわたりになけ

れどもとせり。よみ人しらずとす【秋上・二三九】。

208 天河きり立のほるたなはたの雲の衣のかへる袖かも 同

【二〇六三】

「30ウ

続後撰に第二句霧たちわたるとして入。人丸とす【秋上・二六〇】。

209 まくす原なひく秋風ふくことにあたの大野の萩の花ちる

同【二〇九六】

玉葉に入【秋上・五一二】。

210 秋田かるかりほのやとり匂ふまでさける秋萩みれとあかぬ

かも 同【二一〇〇】

後撰に秋の田のかりほの庵のとして入【秋中・二九五】。

211 しら露と秋の萩とは恋みたれわくことかたきわかこゝろか

も 同【二一七二】

新勅に秋の萩とをこきまぜて、結句「結句」は「として

入」を白く塗抹した上に書く」我心哉として入。柿本人

丸とす【秋上・二三三】。

212 秋田かるかりほをつくりわれを^{イわか}れは衣手さむし露をきにけ

る 同【二一七四】

新古に秋田もるかりいほつくりわがをれば、結句「結

句」は「として入」を白く塗抹した上に書く」露ぞをき

けるとして入【秋下・四五四】。

213 此比の秋風さむし萩の花ちらすしら露をきにけらしも 同

【二二七五】

「31オ

新勅に第二句秋風さむみとして入【秋上・二三二】。

214 つまかくすやの、かみ山露霜に匂ひそめたりちらまくおし

も 柿本朝臣人丸【二二七八】

玉葉にちらまくも^{イおし}おしとして入【秋下・七九三】。

215 此比のあかつき露にわかやとの萩の下葉は色付にけり 作

者不詳【二一八二】

拾遺に入。人丸とす【雜秋・一一一八】。

216 秋されはをく白露にわかやとの浅ちかうらは色つきにけ

り 同【二二八六】

新古にあさちがうは葉として入。人丸とす【秋下・四六

四】。

217 雁かねの寒く鳴なり水茎の岡のくすはは色付にけり 同

【二二〇八】

玉葉に第二句寒くなるよりとして入。人丸とす【秋上・

五九三】。

218 いもかひもとくとむすひてたつた山いま社もみちはしめた

りけれ 同【二二二二】

「31ウ

後撰に下句今ぞもみちの錦をりけるとして入【秋下・三七六】。

219 雁かねのさはきにしよりかすかなるみかさの山は色つきに

けり 同【二二二二】

第二句

続後拾にきなきにしよりとして入【秋下・三八九】。

220 さをしかのつまよふ山の岡へなるわさ田はイからす霜はふる

とも 同【二二二〇】

新古に第二句つまどふ山の、下句わさ田はからじ霜はを

くともとして入。人丸とす【秋下・四五九】。

221 秋田かるたひのいほりに時雨ふりわか袖ぬれぬほす人なし

〔なし〕は「な」を白く塗抹した上に書く〕に 同【二二三五】

新勅に第二ひたの庵に、結句ほす人もなしとして入。人

丸とす【秋下・二九九】。

あまとふや雁のつはさのおほひはのいつこもりてか霜のふ

りけん 同【二二三八】

続後拾に下句いづくもりてか霜のをくらんとして入。人

丸とす【秋下・三八八】。

すみの江のきしを田にはりイほりまきしいねのしかもかるまであ

はぬ君かも 同【二二四四】

拾遺に住よしのきしを田にほり、下句かりほす迄もあはぬ君哉として入。柿本人丸とす【恋三・八三六】。

224 秋の田のほのうへにをける白露のけぬへく我はおもほゆる

かも 同【二二四六】

拾遺に入。人丸とす【恋三・八三五】。

225 秋の田のほむけのよするかたよりにわれはもの思ふつれなきものを 同【二二四七】

新古にほむけの風のとして入【恋五・一四三一】。

色になる小田のほむけの秋風になれもかたよる村雀哉

通村【後十輪院内府集・六八二、新明題和歌集・秋部・二四七五】

226 此歌は万葉を本歌にせり。近代の歌にておもしろくとり

給へるなり。

秋萩の咲ちるのべの夕露にぬれつ、きませよはふけぬとも 同【二二五二】

新古に入。人丸とす【秋上・三三三三】。

227 さをしかの朝ふすをの、草わかみかくろへかねて人にしら

るな 同【二二六七】

新勅に結句人にしらるゝとして入【恋二・七二五】。

228 道のへの尾花かもとのおもひ草いまさら何のものかおもは

るな 同【二二六七】

新勅に結句人にしらるゝとして入【恋二・七二五】。

道のへの尾花かもとのおもひ草いまさら何のものかおもは

ん 同【二二七〇】

後拾遺に入【続後拾遺・恋一・六三一】。

229 さをしかの入野のす、き初尾花いつしかいもかたまくらに

せん 同【二二七七】

新古に入【秋上・三四六】。

230 まきもくのひはらもいまた雲みねは小松か末にあは雪そふ

る 柿本朝臣人丸【二二三四】

新古に第三くもらねば、第四句小松が原にとして入。家

持とす【春上・二〇】。 一 33才

晴草庵やらぬ雪げながらにまきもくの松原くもりてたつ霞か

な【八】

此外あまた本歌にとれり。

231 やたの、の浅ち色つくあらし山みねの淡雪さむくふるら

し 作者不詳【二二三三】

新古に初五やたの、に、結句さむくぞ有らしとして入。

人丸とす【冬・六五七】。

これをとりて、

統拾 やたの野の浅ちが原も埋れぬいくへあらしの峯の白

雪 為家【冬・四四六】

玉葉 吹風のあらしのたかね雪寒てやたの枯野に霰ふる也 衣

早大図書館伊地知文庫『植葉抄』の翻刻と研究(中)

笠前内大臣【冬・一〇一一】

巻第十一

232 初瀬旋頭歌のやゆつきかしたにわかかくせる妻あかねさしてれる

月夜イ人みつらんかに人みてんかも 柿本朝臣人丸【二三三三】

これをとりて、 一 33ウ

初せ山ゆつきが下もあらはれて今宵の月の名社かくれ

ぬ 後鳥羽院下野【秋中・三三三三】

拾遺恋 初瀬のやゆつきが下もかくろへて人にしられぬ秋風ぞふ

く【一一二五】

233 恋しなはこひもしねとや玉ほこの道行人にこともつけ、

ん 柿本朝臣人丸【二三三〇】

これをとりて、

〔歌ナシ、次の歌234を詰めて書く〕

234 ひとりぬとこもくちめやもあやむしろをになるまでに君を

しまたん 作者不詳【二五三八】

新千に第二床くちめやも、第四句をに成までもとして入。

【恋二・二二四九】

わか草の新手柄をまき初てよをやへたてんにく、あらなく

に 同【二五四二】

236 たちておもひゐてもそ思ふ紅の赤もすそ引いにしすかた

を 同【二五五〇】

新勅に入【恋四・九四〇】。

237 朝ねかみわれはけつらしうつくしき君かたまくらふれてし

ものを 同【二五七八】

「34オ

万拾穂に、拾遺集【恋四・八四九】にけさはけづらじう

つくしき人のと有、類句にわれはけづらじ人の手枕と有、

可_レ尋。人丸とす。

238 恋しなん後は何せんわかいのちいける日にこそみまくほり

すれ 同【二五九二】

拾遺にいける日のため社人はみまくほしけれとして入。

大伴百世とす【恋一・六八五】。

239 あし引の山さくら戸を明置てわかまつ君をたれかと、む

る 同【二六一七】

続後拾に入。人丸とす【恋三・八〇二】。これをとりて、
拾遺

足引の山さくら戸をまに明て花こそあるじたれをまつ

らん【二〇一六】

240 いはねふみかさなる山にあらねともあはぬ日あまた恋わた

るかも 柿本朝臣人丸【二四二二】

い物にかさなる山にあらねどもと有【第七十四段・一三

241 山しろう古来しなのこはたの山さと古来にうまはあれとかちよりそくる古来君を古来われくなれを

おもひかね【二四二五】

「34ウ

拾遺に山しなのこはたの里に、下句かちよりぞくる君を

おもへばとして入【雑恋・一二四三】。類字名所山城の

と有。可_レ尋。これをとりて、

千載 我駒をしばしとかるか山城のこはたの里にありとこたへ

よ 俊頼【雑下・一一七三】

新後拾 こはた山君がゆき、は馴にしをかちよりをくる旅ぞ悲し

き 高階宗城【雑下・一四六八】

242 青柳のかつらき山にたつ雲のたちてもあても妹をしそ思

ふ 同【二四五三】

拾遺に初五あし引の、第三ある雲の、結句君を社おもへ

として入。よみ人しらずとす【恋三・七七九】。これを

とりて、

新古 白雲のたえまになびく青柳のかづらき山に春風ぞ吹 雅

新後撰 經【春上・七四】

しるらめやかづらき山にゐる雲のたちるにか、るわが心

かも 式子内親王【恋一・七七九】

243 みか月のさやかにみえす雲かくれみまくそほしきうた、此

比 同【二四六四】

「35才

拾遺に第二さやかにみえて、結句うたて此比として入
【恋三・七八三】。

244 わかせこに我恋をれば我やとの草さへおもひうらかれにけ

り 同【二四六五】

拾遺に入【恋三・八四五】。

245 みなそこにおふる玉ものうちなひき心をよせてこふる此

比 同【二四八二】

拾遺に結句こふる比哉として入【恋一・六四〇】。

246 あつさ弓末のはらのとかりする君かゆつるのたえんとお

もへや 同【二六三八】

新勅に第二句末の、草にとして入【恋四・八七〇】。

247 あつさ弓ひきみゆるへみこすはこすこは社をなそこすはこ

はそを 同【二六四〇】

拾遺にひきみひかずみ、下句こば社猶ぞよそに社みめと

して入。人丸とす【雑賀・一一九六】。

248 玉ほこの道行つかれいなむしろしきても君をみんよしもか

も 同【二六四三】

新勅に結句みるよしも哉として入【恋四・八八〇】。

249 をはた、の板田の橋のこほれなはけたよりゆかんなこひそ

わきも 同【二六四四】

続後拾に第三こほれなば、結句こふなわがせことして入
【恋三・八五四】

千載 朽果てあやうくみえしをはたゞのいたゞの橋も今わたす

也 法橋泰覚【釈教・一二四三】

新統古 をはたゞの板田の橋とこぼる、はわたらぬ中の涙也け

り 源兼氏【恋二・一一四三】

此外あまた本歌にとれり。

250 みやき引泉の袖にたつ民のやむ時もなく恋わたるかも 同

【二六四五】

251 とにかくにもものはおもはずひた人のうつすみなはのた、ひ

とすちに 同【二六四八】

252 拾遺に第三句ひだたくみとして入【恋五・九九〇】。

あし引の山田もるおのをくかひのしたこかれのみわか恋を

らく 同【二六四九】

新古に第二山田もる庵に、下句したこがれつ、我こふら

くはとして入【恋一・九九二】。

イすき そきいたもてふける板まのあはさらはいかにせんとかわか

ねぞめけん 同【二六五〇】

拾遺にすぎいたもてとして入【恋二・七四六】。

「36才

「35ウ

254 難波人あしひたくやのす、たれとをのかつま社床めつらな
れ 同【二六五二】

拾遺に第二あしびたくやは、結句床めつらなれとして入
【恋四・八八七】。

255 ちはやふる神のいかきもこえぬへし今はわか名のおしけく
もなし 同【二六六三】

拾遺に入。人丸とす【恋四・九二四】。伊物に下句大官
人のみまくほしさに、なをして入【第七十一段・一三〇】。

大官人の歌統千に入【恋三・一三九六】。

256 さくら麻アサのをふの下草露アサしあらはあかしてゆかんおやはし
るとも 同【二六八七】

新勅に本行のま、にて入【恋四・八七七】。 一 36ウ

いぬかみのとこの山なるいさや川いさとをきこせわか名つ
けすな 同【二七一〇】

古今になとり川、下句いさとこたへよわが名テカもらすなど
して入【墨滅歌・一一〇八】。

258 おく山の木のはかくれて行水のをとき、しよりつねわすら
れす 同【二七一二】

統千に第二木のはかくれに、結句常にわすれずとして入
【恋二・一一四六】。

259 しかのあまのけふりやきたてやく汐のからき恋をもわれは
するかも 同【二七四二】

新勅に結句我はする哉として入【雑四・一三三六】。

260 みなと入の芦分小舟さはりおほみわかおもふ君にあはぬ比
かも 同【二七四五】

拾遺にわがおもふ人にあはぬ比哉として入。人丸とす
【恋四・八五三】。

261 波まよりみゆるこしまの浜楸ひさしくなりぬ君にあはずし
て 同【二七五三】

拾遺に結句君にあはずしてとして入【恋四・八五六】。
第三浜ひさし結句
い物に君にあひみでとす【百十六段・一九七】。 一 37オ

これをとりにて、
金葉
七十にみちぬる汐の浜楸ひさしくよにもむもれぬる哉

俊頼【雑下・六六五】
月清
ながめこし沖津波まの浜楸ひさしくみせぬ春霞哉【一〇
一〇】

此浜楸・浜ひさしあまた本歌にとれり。

262 朝かしはぬるや河へのしの、めにおもひてぬれば夢にみえ
くる 同【二七五四】

新勅に結句「結句」は「第三句」を白く塗抹した上に

書く夢にみえつ、として入【恋二・七二四】。

263 紫のなたかのうらのなびきもの心はいもによりにしもの

を 同【二七八〇】

新千に入【恋二・一二〇九】。これをとりて、

我恋は名だかのうらのなびきもの心はよれどあふよしも

なし 院少将内侍【恋二・八三七】

264 かたいともてぬきたる玉のを、よはみみたれやしなん人の

しるへく 同【二七九一】

新勅【恋二・七一九】・続後撰【恋一・六八九】に入。

浅緑柳の枝のかた糸もてぬきたる玉の春の朝露 為家

【玉葉・春上・一〇六】

265 いせのあまの朝なゆふなにかつくてふあはひのかひのかた

おもひして 同【二七九八】

新勅に入【恋四・八七二】。

266 おもへとも思ひもかねつあし引の山とりのおのななきこの

よを 同【二八〇二】

新千に入。人丸とす【恋二・一二三三七】。これをとりて、

花見つ、けふもくらしつ足引の山鳥の尾のながき日影を

【二六九七】

267 あし引の山とりの尾のしたり尾のなか／＼しよをひとりか

もねん 同【二八〇二或本歌】

268 明ぬへしちとりしはなく白妙の君かたまくらいまたあかな

くに 同【二八〇七】

新勅に初五あけんととして入【恋三・七九九】。38才

うらふれて物はおもはしみなせ川ありても水はゆくてふも

のを 同【二八一七】

269 水無川ありて行水なくは社終に我身を絶ぬと思はめ

み人しらず【恋五・七九三】

ひたすらにたえやはてなんみなせ川ありて行水袖にせく

とも【二七三七】

此外あまた本歌にとれり。

270 木のまよりうつろふ月の影おしみたちやすらふにさよ更に

けり 同【二八二二】

続後【撰拾】(ミセケチ)に入。人丸とす【秋下・三五七】。

巻第二(十二)の誤り

271 ふたりしてむすひしひもをひとりして我はときみした、に

あふまでに 同【二九一九】

伊物に此上句と同じくて、下句あひみるまではとかじと

早大図書館伊地知文庫「楳葉抄」の翻刻と研究(中)

六七

ぞ思ふとせり【第三十七段・七二】。

272 いまよりはあはしとすれや白妙のわか衣手のひる時もなき 同【二九五四】 38ウ

新古に結句かはく時なきとして入【恋五・一四二八】。

273 たらちねのおやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかい

もにあはすて 同【二九九一】

拾遺に入。人丸とす【恋四・八九五】。

274 あし引の山よりいつる月まつと人にはいひていもまつわれ

を 同【三〇〇二】

拾遺に君を社までとして入。人丸とす【恋三・七八二】。

新古 君まつと闕へもいらぬ槇の戸にいたくな更ぞ山端の月

式子内親王【恋三・一二〇四】

新勅 こぬ人を何にかこたん山端の月は待いで、さよ更にけ

り 雅経【恋五・九六八】

右二首は本歌の心をとれり。

275 君かあたりみつ、もをらんいこま山雲なくしそ雨はふる

とも 同【三〇三二】

新古【恋五・一三六九】・伊物【第二十三段・五〇】・

古采風体【二四四、二二二】に第二句みつ、を、らんと

す。 39オ

276 朝な夕な草のうへ白くをく露の消はともといひし君は

も 同【三〇四一】

新統古に草ばに白くとして入【恋五・一五二〇】。

277 みかりするかりはのをの、ならしはのなればまさらて恋こ

そまされ 同【三〇四八】

新古に結句恋ぞまされるとして入。人丸とす【恋一・一

〇五〇】。

統拾 夜をさむみかりはのをのに鳴鹿のなればまさらぬ妻をこ

ふらし 光成【忠房親王】を墨線で消した横に書く

【秋上・二五七】

新統古 はしたかの尾ふさのすゝをなら柴のなればまさらで立

きゝす哉 忠房親王【冬・七三二】

新勅 ゆふつ、みしらつき山のさなかつら一云絶んといもわかおもはな後もかならずあはんと

そ思ふ 同【三〇七三】

新勅にさねかづらとして入。下句は本行のま、也【恋

四・八七三】。

279 中々に人とあらずはくは子にそならまし【らまし】は

「かへめり」を白く塗抹した上に書くものを玉のをはか

り 同【三〇八六】

い物に第二恋にしなずは、第四句なるべかりけるとせり

【第十四段・二〇】。

「39ウ

280 玉のを、かたをによりてを、よはみみたる、時にこひさら

めやも 同【三〇八一】

風雅に入【恋五・一三三七】。

《底本279280の歌順なれど、野外にそれぞれ「後」「前」と、

歌順の入れ換え表示あり》

281 遠つ人かりちの池にすむ鳥のたちでもゐても君をしそ思

ふ 同【三〇八九】

新勅に入【恋二・七二三】。

282 さひのくまひのくま川にうまとめてうまに水かへわれよそ

にみん 同【三〇九七】

古今にさ、のくま初五空白駒とめてしばし水かへ影をだ

にみんとして入【神遊歌・一〇八〇】。

これをとりて、

続後撰 駒とむるひのくま川の底清み月さへ影を移しつる哉 長

方【秋中・三三三九】

駒とめて影みる水や濁るらんひのくま川の五月雨の比

中臣祐茂【夏・三六三三】

283 しかのあまのつりにともせるいさり火のほのかにいをもみ

るよしも哉 同【三一七〇】 「40オ

拾遺に入【恋二・七五二】。

284 すみよしの岸にむかへるあはち鳥あはれと君をいはぬ日日そなは

なし 同【三一九七】

拾遺【恋五・九二六】・古来風体【二四九】に結句いは

ぬ日ぞなきとす。拾遺に人丸とせり。

卷第十三

285 月も日もかはり行とも久にふるみむろの山のとつ「つ」

は「こ」を白く塗抹した上に書く宮所 同【三三三二】

新勅【賀・四八九】・古来風体【一五二】結句とこ宮所

とす。

286 衣手に山おろし吹て寒き夜を君きまたますはひとりかもねん

同【三二八二】

新古に入。人丸とす【恋三・一二〇八】。

卷第十四

287 かつしかのま、のうらまをこく船のふな人さはく波たつら

しも 同【三三四九】

新勅に入【雑四・一三〇二】。

288 つくはねの岩もと、ろに落る水世にもたゆらに我おもはな

「40ウ

くに 同【三三九二】

これをとりて、

後撰

つくばねの峯より落るみなな川恋ぞつもりて淵となりぬ

る 陽成院【恋三・七七六】

289 たにせはみ峯まではひたる玉かつらたえんの心わかおもは

なくに 同【三五〇七】

続後拾に第二峯にはひたる、結句わがおもはなくにとし

て入【恋四・九一三】。

い物に第二峯まではへる、下句たえんと人にわがおもは

なくにとせり【第三十六段・七〇】

卷第十五

〔玉もかるをとめを過て〕へ一〇字墨線にて消す

290 天さかるひなのなかちをこきくればあかしのとより家のあ

たりみゆ 同【三六〇八】

「41オ

人丸歌曰やまとしまみゆ【人丸集・五五】。

291 むこのうみにはよくあらしいさりするあまかつり船波の

うへにみゆ 同【三六〇九】

一玉葉初五むこのうらの、第二とまり成らし、結句波まよ

りみゆとして入【雑二・二二〇七】。

292 あこのうらに船のりすらんをとめらかあかものすそに汐み

つらんか【三六一〇】

人丸歌にあみのうらに、又曰たまものすそに【人丸集・

三六・五七】、

拾遺に初五おふのうらに、第三句わきも子がとして入。

人丸とす【雑上・四九三】。

293 としにありて一夜いもにあふ彦星も我にまさりておもふら

んやも 同【三六五七】

拾遺に入。人丸とす【秋・一四八】。

294 風のむたよせくる波にいさりするあまをとめらかものすそ

ぬれぬ 同【三六六一】

「41ウ

風雅に初五風をいたみ、第四句あまをとめらがとして入

【雑中・一七二三】。

295 ゆふされは秋風さむしわきも子かときあらひころも行ては

やきん 同【三六六六】

拾遺に入。人丸とす【雑上・四七八】。

296 あまとふや雁をつかひにえてし哉ならの都にことつけやら

ん 同【三六七六】

拾遺に〔第五〕^{第三}〔ミセケチ〕いつしかも、結句ことづて

やらんとして入。人丸とす【別・三五三三】。

卷第十六

297 あさか山かけさへみゆる山の井の浅き心をわかおもはなく

に 同【三八〇七】

古今【仮名序】・大和物語【第五百五十五段・二六〇】に

下句浅くは人をおもふものかはとせり。

298 なら山のこのてかしはのふたおもてにもかくにもねちけ

人かも 博士消奈行文大夫【三八三六】

これをとりて、
「42才

新千 時雨ふるこのてかしはのふたおもてにもかくにもぬ

る、袖哉 土御門院【雑上・一八〇六】

巻第十七

左大臣橘宿祢(註)

299 ふる雪の白かみまでに大君につかへまつれとたふとくもあ

るか【三九二二】

新勅に入【賀・四九二・「井手左大臣」と表記】。

300 ぬは玉のよは更ぬらし玉くしけふたかみ山に月かたふき

ぬ 史生土師宿祢道良【三九五五】

続古に入。家持とす【秋上・四二九】。

早大図書館伊地知文庫『稽葉抄』の翻刻と研究(中)

大伴宿祢家持

301 しら波のよするいそまをこく船のかちとるまなくおもほ

え【へ】(ミセケチ)し君【三九六一】

後撰に白波のよするいそまをこく船のかちとりあへぬ恋

もする哉。黒主とす【恋二・六七〇】。不審。又「42ウ

新拾 なでもかくあまのとわたるあまをぶねかちとるまなく物

おもふらん 基俊【恋二・一〇二五】

守大伴宿祢家持

302 ふせの海の沖つ白波ありかよひいやとしのはにみつ、しの

はん【三九九二】

新勅に入【羈旅・四九五】。これをとりて、

新千 声たえず聞えぞわたるふせの海に鳴や千鳥のありがよひ

つ、為藤【冬・六七六】

303 みなと風寒くふくらしなこの江に妻こひかはしたつさはに

鳴 大伴宿祢家持【四〇一八】

続古に入【雑中・一六三五】。

巻第十八

田辺史福齋

304 藤波の咲行みれば郭公鳴へき時にちかつきにけり【四〇四

二

玉葉に第二花咲みれば、第四句鳴べき時はとして入。赤
人とす【春下・二七九】。

「43才

左大臣橘宿祢

305 ほり江には玉しかましを大君をみふねこかんとかねてしり
せは【四〇五六】

統千に入【雑上・一六三七】。これをとりて、

統拾
みふねこぐ堀江の芦にをく露の玉しく計月ぞさやけ

き 平政村【秋下・三〇五】

統後拾
をし照や難波堀江にしく玉の夜の光は螢也けり 定家

【夏・二二九】

大伴宿祢家持

306 すかろきのみよ栄んとあつまなるみちのく山にこかね花さ

く【四〇九七】

歌林良材云、是によりて年号を感宝の二字を加られたり

とぞ。

巻第十九

同

307 から人もふねを浮へて遊ふてふけふそわかせこ花かつらせ

な【四一五三】

「43ウ

新古に初五から人の、結句花かづらせよとして入【春下・一
五一】。

次官内蔵忌寸繩麿

308 たこのうらの底さへ匂ふ藤波をかさしてゆかんみぬ人のた
め【四二〇〇】

拾遺に入【夏・八八】。

掾久米朝臣広縄

309 ふち波のしけりはすきぬ足引の山ほと、きすなとかきなか

ぬ【四二一〇】

統千に第二さかりは過ぬとして入。よみ人しらずとす

【雑体・七〇八】。

大和守藤原永手朝臣

310 袖たれていさわかそのに鶯の木つたひちらす梅の花みに

【四二七七】

拾遺に結句花みんとして入。よみ人しらずとす【春・二

八】。

「44才

これをとりに、

新後撰
まださかぬ軒ばの梅に鶯の木つたひちらす春の淡雪 信

実【春上・一三三】

少納言大伴宿祢家持

311 足引の山下日影かつらけ〔「け」は「な」を白く塗抹した

上に書く〕るうへにやさらに梅をしたはん〔四二七八〕

新勅に第三句かづらなるとして入。よみ人しらずとす

〔雑一・一一一〇・中納言家持〕。

巻第二十

帳丁若麻統部諸人

312 にはなかのあすはのかみに小柴さしあれはいは、んかへり

くまでに〔四三五〇〕

俊頼悔離別といふ事をよめる 今更に妹婦さめやいちし

るきあすはの神に小柴さすとも〔散木奇歌集・八五二〕、

歌林良材にも出〔五三三五〕。 一 44ウ

頼むぞあすはの神にさす柴のしばしがほどもみねは恋

しき〔新千載・恋四・一四八三・法印定為〕

主人散位寮散位馬史国人

鳩とりのおきなか、は、たえねとも君にかたらんことつき

めやも〔四四五八〕

新勅に第四句君にかたらふとて入〔恋四・九三八〕。

源氏物語に、

〔二行アキ〕

大伴宿祢家持

314 ふなきほ堀江の川のみなきはにきみつ、なくはみやこと

りかも〔四四六二〕

同

315 初春の初ねのけふの玉は、き手にとるからにゆらく玉のを

〔四四九三〕

一 45オ

新古に入。よみ人しらずとす〔賀・七〇八〕。これをと

りて、

〔空〕白 ゆらく玉のを絶ざりしほど計だに逢みてし哉、

〔恋二・七三八・大炊御門右大臣〕 一 終

注3

以下、底本では「万葉集」の歌の作者名を、歌の下では

なく、前行に記すのがほとんどである。本稿も底本の体裁

を尊重し、前行に記されているものはその位置に記した。

ただし、「万葉集」の巻数の下に作者名が記されている場

合は、次行に移した。 (たけした ゆたか・本学教授)